

令和5年度大友氏顕彰フォーラム in 大分報告書

と き:11月11日(土)13:00~16:00

ところ:大分商工会議所6階大ホール 入場者数 120名

今回も恒例となった原川二郎氏の歌から始まり、来賓に足立義弘氏(大分市議会議員・大河ドラマ推進協議会顧問)、木田昇氏(大分県議会議員)、下川宏樹氏(大分合同新聞社執行役員・編集局長)を迎え、牧達夫大友氏顕彰会理事長・大河ドラマ推進協議会会長のあいさつで始まった。なお、来賓の秋吉貢次氏(神奈川大分県人会会長)は急遽所用のため欠席した。なお、司会は藤田賢治顕彰会理事が務めた。



講演1「世界史の中の戦国大名」

講師 鹿毛敏夫 名古屋学院大学国際学部長教授

鹿毛敏夫氏は中世の特に大友氏を中心とした戦国史に従来にない史観を打ち立てつつある。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の天下統一に至るまでの群雄割拠の歴史に終始している従来の戦国史に一石を投じた。

歴史は英雄のみで作られるわけではなく、また日本国内のみで完結するのではないことは、西洋に残る宣教師の記録を見れば歴然である。海外に目を向けた当時の大名は大友氏に限らず有馬・大内・相良・島津など主に西国大名が多く、客観的にそのかわりを論じた。その文脈の中でさりげなく大友義鎮の存在をうったえたことは、声高に言うより一層の効果をもたらした。

事実、一昨年頃よりマスコミで日本の海外貿易が戦国大名に大きな影響を与え、日本国内の出来事だけで論じていては真の姿は見えてこないという風になってきたようである。

さらに幕末、近代日本たらしめた明治新政府の指導者たちは薩長土肥、特に山口・鹿児島県人が多くすべて西国出身。これは偶然ではなく、その約300年前の経験が脈々と受け継がれてきたからに他ならない。この考え方は新鮮であり、“目から鱗”の感がした。

鹿毛敏夫氏の戦国史から近世史に至る歴史観がこれから普遍的になることを大いに期待している。



講演 2 「大分とアルメイダ」

講師 坪根伸也 大分市教育委員会文化財課専門官

坪根伸也氏は今春まで教育委員会文化財課課長として第一線で指導してきた。引き続き少し自由な立場で持論を展開した。大分市民にとってアルメイダは「アルメイダ病院」として名前だけは知られている。しかし、ルイス・デ・アルメイダとして真の姿を知る市民は少ない。育児院や内科・外科病棟を造り外科手術を行うなど、日本初は彼によって成されたことは知る人ぞ知る事柄ではあるが、坪根氏は懇切丁寧に編年式にアルメイダの経歴・事績を挙げ聴衆に分かりやすく説明した。



アルメイダは大友宗麟義鎮より5歳上で、医師であり商人でもあり、のち修道士でもあった。宗麟はことのほか彼を信頼し、親友として一生付き合った。これらを再度顕彰し、現在大分駅前には宗麟像、ザビエル像に加えアルメイダ像もあるべきだとの認識を聴衆に与えた。

エッセー第2弾「ふるさと大分への想い」表彰式

プログラムの最後に各入賞者を発表した。今回は応募者こそ前回に比べ少なかったが、秀作ぞろいで審査員4人が全員一致する特選はなかった。したがって4人受賞としたが、佳作にしても入選に推す作品があったことを付け加えておきたい。なお、全作品(希望者のみ)は令和6年度の『大友氏の風景(12)』に掲載予定。下記氏名は敬称略としていただいた。



「特選」4名 副賞＝図書券(8千円)

安達 郁雄「終焉の地はやはりふるさと大分」国東市

呉藤 秀昭「WE LOVE おおいた」大分市

江藤 孝文「二つの歌に思いを込めて」大分市

鳥谷 靖子「我が故郷、大分」東京都

「入選」13名 副賞＝図書券(2千円)

田崎 照代、小松 恵子、後藤 明彦、船橋 智久、北島 俊一大塚 雄一郎、牧 久美、三ヶ尻 洋一、二宮 基陽、佐志原 圭子、三宅 英明、都甲 強、工藤 富三

「特別賞」2名 副賞＝図書券(2千円)

清田 隆道、若杉 孝宏

「佳作」 副賞＝図書券(千円)井本 盛夫、片野 アケミ、久良 修二、財津 定行、佐藤 英夫、土谷 恭生、安松 文次、

「審査講評」

審査委員長／牧 達夫（NHK大河ドラマ「大友宗麟」誘致推進協議会会長）

今回のエッセー募集につきましては、テーマを広げて「ふるさと大分への想い」がテーマでした。応募された作品は、大分の自然、食べ物、偉人、家族、自身の出自、歴史、文化等々あらゆる角度から「郷土愛」・「大分の誇り」を表現されており、楽しく拝見させていただきました。

作品はいずれも甲乙付け難い作品ばかりでしたので、審査は容易ではありませんでした。そうした中、「特選」を4名、「入選」を13名、「特別賞」を2名選びました。そして7名の方々の作品を佳作としました。

審査委員／三浦 健（大分県芸術文化スポーツ振興課長）

応募された作品は、大分の郷土愛を様々な視点から論じており、非常に興味深く、そして、とても楽しみながら拝見することができました。

また、ご高齢の方の作品が多く見受けられましたが、どれもが、大分の素晴らしさを次代に語り継ぎたいという思いが溢れているように感じられました。

私としても、新たな発見があり、郷土大分の計り知れない奥深さを感じることができ、よい経験となりました。応募者の皆さまに感謝いたします。

審査委員／坪根 伸也（大分市教育委員会文化財課専門官）

今回の26件の応募作品は、全て素晴らしい構成、内容、文章表現を持ち、さらに多くの知見が巧みに盛り込まれています。読むことで学びが得られる作品も多く、大いに刺激を受けました。これらの点から見ても、どれも優れたものばかりで、甲乙つけがたいと思いました。したがって、審査において、応募の趣旨に従い、次の基準により審査を行いました。

- ① テーマに即した内容か(大分への思いが明確に表現されているか)
- ② 主張が明確であるか
- ③ 説明的な文章が過剰でないか(歴史書のような)
- ④ 借り物の内容ではなく、自身の体験に基づく真摯な思いが表現されているか。

審査結果はこれらの基準に基づいて採点しています。

審査委員／下川 宏樹（大分合同新聞社編集局長）

県外でたまたま「大分んシ」に出会うと、とても嬉しくなり、すぐに親しくなる傾向があります。大分県人の郷土愛には、互いを古くからの友人であるかのように感じさせる強い力があるからだと思います。26作品からは「大分大好き」のオーラを感じます。郷土愛がグイグイ打ち出されており、まるでエッセーの世界を歩いていて、初対面の「大分んシ」に次々と出会った気分です。

良い作品ばかりでした。大分サイコウー！

令和5年度大友氏顕彰フォーラム in 津久見報告書

と き:11月18日(土)13:00~16:00

ところ:津久見市民会館大ホール 入場者数 90名

オープニングは恒例となった原川二郎氏の歌、津久見市歌ほか3曲を熱唱した。来賓に川野幸男津久見市長、後藤榮一津久見市教育長、原尻育史郎津久見商工会議所専務理事をお迎えし、牧達夫理事長のあいさつで始まった。来賓の方々は、大友氏の歴史についてかなり詳しくご存じで、ご自分の想いを話された。司会は大分会場と同じ藤田賢治大友顕彰会理事が務めた。



講演 演題「宗麟と津久見」

講師 木村武司 津久見史談会会長

「津久見にや武士はおらんかった!」。木村氏は若いころから地元の諸先輩の声に疑問を感じてきた。小学校の教師と中学校の社会科の教師を経て郷土史家として現在活動している。当顕彰会の会員でもある。

津久見は大友宗麟終焉の地であり、大分の中世史、就中それは大友氏の歴史である。特に今回は宗麟がどうして臼杵に移り住んだか、そして津久見を終焉の地に選んだのはなぜかを残された史料や多くの論文を考察し持論を展開、スライド画面を有効に使い説明した。

通説である臼杵に転居した原因は、二度の謀反事件に身の危険を感じた1556年が最初である。実はこれが宗麟と臼



杵の最初の出会いではなく既に1551年ころ宗麟は丹生島に興味を抱き、上野氏から譲りうけたことが上野文書に記されていると、新しく発見された資料に基づき説明した。

また、晩年の宗麟が津久見に居を定めたきっかけは「島津との敗戦や新妻ジュリアとの信仰生活を望んだため等が考えられる」など、1時間きっかりで終了。濃い内容で無駄がなく聴衆を飽きさせることなくみごとな講演だった。



アトラクション「津久見扇子踊り」

扇子踊りは、有名な「鶴崎踊」と同じように戦国時代に誕生したらしい。こちらは戦没者や庶民の霊を弔うために生まれという。矢を射るしぐさや武士の動きなどが舞われていると聞く。その中に優美さも兼ね備え、なかなか見ごたえのある魅力的な踊りだった。残念ながら踊り保存会と音響スタッフとの連携かうまくいかず短時間で終わった。両者に任せっきりで主催者として確認作業を怠った。責任を感じている。



意見交換会 テーマ「大友氏と津久見武士団」

木村武司、牧達夫、若杉孝宏(大友氏顕彰会副理事長・大河ドラマ事務局長)

牧達夫氏をコーディネーターに木村・若杉両氏が意見を述べ合うといった形で進めた。話は1435年に起きた「姫嶽の合戦」から始まった。これは大友、大内の内部抗争に幕府が介入した複雑なもの

で、津久見・薬師寺・加島・御手洗氏といった海部水軍に内陸部の田北氏を巻き込んだほぼ 2 年に及ぶ合戦だった。この背景には、博多での大陸との貿易を独占しようとした大内氏が幕府へ持直に無実の罪をきせて訴え、大友を討伐させ筑前を乗っ取ろうとした大内氏の思惑があった。かんたんに言えば博多の争奪戦といったものである。

次に時代は飛んで1586年、島津の豊後侵攻の時四浦合戦で活躍した四浦の水軍衆の活躍を史料で木村氏が説明した。

このよう戦国時代「津久見は武士だらけ」であったのだ。もっとも兵農分離はしておらず、翌年九州征伐に来た豊臣(秀長)軍はからしてみれば、前時代的な豊後のこのような状態に驚いたという。

総括:この日は思いがけないアトラクションの短縮と手際よい進行に予定より早めの 3:40 に終了し、参加者からは好評を得た。

また、大分市からバスツアーで15人が参加、臼杵城、大友公園、宗麟墓地3か所を訪ねた。この秋一番の冷え込みと強風でゆっくり見学できなかった。(個人的感想で恐縮だが、いままで会場設営に携わってきたが、今回初めてのガイドで貴重な経験をさせてもらった) 大分、津久見とも報告は若杉孝宏

